松坂市出身の越後人による不思議発見・お宝発見

「上越だより」

上越市本城町　下西　隆子（三重県松坂市出身）

ブロンズプロムナード

上越市と松阪市との共通点の一つは、城下町であり、城跡が公園になっている点です。

高田城と松阪城を比べてみると、おもしろいことに気づきました。

松阪城は、蒲生氏郷によって一五八八年築城されました。梯郭式平山城（ひらやましろ）という形式で、石垣の美しい、立体的に美しい印象です（百名城の一つに選ばれている）。滝廉太郎の「荒城の月」を聞くたびに、私は松阪城の城跡を思い浮かべます。

高田城は、徳川家康の六男（二代将軍秀忠の弟）である松平忠輝によって、一六一四年築城されました。形式は輪郭式平城です。両城の築城時期は、わずか二十六年の差ですが、安土桃山時代と江戸時代の違いが、城の形に表れているのかもしれません。

高田公園に、ブロンズプロムナードができたのは、昭和五十七年から平成五年にかけてのことです。西堀に沿った遊歩道、約五百五十メートルの間に、十六基のブロンズ像が設置されています。上越市市役所でその趣旨を聞いたところ、次のようなものでした。

「働くだけの生産都市」ではなく「文化的教育囲気を加えること」によって「住む人」も「訪れる人々」にとっても「魅力ある都市になる」ことをめざしている。また、「市民」が「いつでも文化的施設に接することができる」ことを考えて「高田公園の野外」に「ブロンズプロムナード」という形になった。「上越市ゆかりのある」、また「趣旨に賛同」した芸術家による。

○上越出身の作家と作品名
滝川毘堂（旭光）・岡本銕二（なぎさ）・岩野勇三（BALANCE）

○上越ゆかりの作家と作品名
戸張幸男（明）・小池藤雄（蒼い空）・千野茂（フォーム）・峯田敏郎（西風の防波堤）

○趣旨に賛同した作家と作品名
佐藤忠良（演技生）・船越保武（LOLA）・柳原義達（道標　鴉）・峯孝（出）・堀内正和（はてなの萼）・建畠覚造（DISK）・向井良吉（流木の渚のジャコメッティ）・土谷武（蟬）・澄川喜一（そりのあるかたち“84”）

十六名のラインナップを見て、「えー、あの人！知ってる！」と驚かれる方は、よほどの美術通でしょう。みなさんが、美術にほどほどの（私が持っている程度の）知識があることを前提に、作家並びに作品を紹介したいと思います。

今年三月、大御所・佐藤忠良さんが九十八歳で亡くなりました。長い作家生活で、彫刻はもちろん本の挿絵などの仕事もされていました。福音館書店発行の童話『おおきなかぶ』・杉みき子さんの「小さな雪の町の物語」の挿絵は、佐藤さんの手になります。作品「演技生」は、娘さんである女優・佐藤オリエさんをモデルにしているそうです。

船越さんとは、同い年で終生のライバルでもあり、また、岩野さんは、高校を卒業後すぐに佐藤さんの指導を受けるようになりました。この「ブロンズプロムナード」に、ライバル同士、そして師弟の作品が並び立っているわけです。

上越市の人なら誰でも知っている銅像といえば、一つは春日山城跡の登り口にある「上杉謙信像」です。これを作ったのは、「旭光」の作者・滝川毘堂さんです。もう一つ、スキー発祥の地の象徴的像である「レルヒ像」は、「明」の作者・戸張幸男さんの作です。（「謙信像」「レルヒ像」とも、観光パンフレットに必ず使われます。）

ブロンズプロムナード岩野勇三：吹雪

十六基のブロンズ像の中には、女性像が九基、抽象的な像が五基あります。その抽象的な像の中でも、向井さんの「流木の渚のジャコメッティ」や堀内さんの「はてなの彗星」などは、作品名を手がかりに謎解きをするおもしろさがあります。そして、鴉の像が一基、これは柳原さんの作品です。上越は、カラスが多数生息しており、そのカラスたちの代表として、雄々しい姿を「ブロンズ」にしてもらって、カラスも喜んでいる？

丸山薫の詩に「鴉」があります。

山には黒装束の者がいて
いつも寒い風を呼んでいた
山には振り向かない頬の者がおり
いつも夕焼に涙を垂らしていた

上越教育大学名誉教授の峯田さんの少女の像は、老若男女問わず人気のある作品です。かたい金属製なのに「風」を感じます。峯田さんの他の作品は、大学をはじめ、公共施設に見られます。峯田さんの人物像からは、立原道造の詩「夢みたものは……」の一節が思い出されます。

夢みたものは　ひとつの愛
ねがったものは　ひとつのこころぐ
それらはすべてここに　ある　と

ブロンズプロムナードのすぐ近く、同じ公園内に「岩野勇三ブロンズコーナー」（平成三年設置）があり（岩野さんは、昭和六十二年五十六歳の若さで死去）、十基の作品群が展示されています。「おまんた（新潟の言葉で、あなた方という意味）」「吹雪」と命名された上越らしい像、「はぐれっ子」は、不安な子供の内面が伝わってきます。五十メートル四方の空間に漂う雰囲気を例えるなら、ビバルディの「四季」が聞こえてきそうな空間、緊張感と安らぎとが交錯します。

この事業がきっかけとなり、上越市は昭和六十一年、自治省から「潤いのあるまちづくり」で自治大臣賞を受けたそうです。が、ブロンズたちはもはや高田公園の風景にとけ込んでいるのか、わざわざ鑑賞している人は見かけません。それでいいのですね。芸術が、特別なものではなく、なにげないところに、さりげなくあるのが「上越流」なのでしょう。

七月二十九日から、高田公園では「はすまつり」が開かれます。堀を埋めつくす蓮の花とブロンズたちが、たくさんの人々をお迎えすることでしょう。

糸魚川のバタバタ茶

八月三日（水）、直江津駅からおよそ三十分間、JR北陸線上りの列車に乗って、糸魚川市へ行ってきました。糸魚川駅近くにある県史跡、相馬御風宅（糸魚川市大町）にて「バタバタ茶」を体験するためです。「バタバタ茶の会」の有志の人々は、六月から十月にかけて第一水曜日にバタバタ茶の振る舞いを行っています。

「バタバタ茶」の手順は次のようなものです。

抹茶茶碗よりちょっと深めの、口がすぼまった形の茶碗に、耳かきに二杯くらい塩を入れます。そこへ煮出した番茶を少量入れます（三回くらいで飲める量）。夫婦茶筅（みょうとちゃせん）といって二本の茶筅がくっついたもので、勢いよくバタバタ混ぜます。膝の上で茶碗を抱え込むように持って、「一」の字」を書くように茶筅を動かします。すると、白い泡が立ってきます。抹茶の茶筅と違って、穂先が長くて、筆のように軟らかくなっています。

この場合の番茶とは、「麦茶」「ほうじ茶」「煎った大豆」「お茶の花」「カワラケツメイ」を使います。これらを混ぜた茶葉を一時間くらい煮出し、ベースになる「番茶」を作ります。この材料と配合は家によって違うようです。

「お茶の花」「カワラケツメイ」は、蒸して乾燥させます。「カワラケツメイ」とは、はじめて聞く植物名でしたが、マメ科の薬用植物で、「強壮」「利尿」「鎮咳」などの薬効があるとのこと。「お茶の花」は、生家の近くにお茶の木があり、白い花を見たことはありましたが、飲用になるとは知りませんでした。（余談ですが、小学生のころ、全校生徒が「お茶の実」を集めて、学校図書館の書籍費を稼ぎ出しましたっけ。）

この日、囲炉裏のまわりに「バタバタ茶の会」のおばさんたちが集い、お客を招き入れます。泡立ったお茶と、

糸魚川　バタバタ茶

キュウリやミョウガの漬け物・キャラ蕗・大福豆などの手作りのお茶請けが振る舞われました。お客は、数名ずつですが絶え間なくありました。おばさんたちは、子供のお客には「絵日記に書いてね」「かわいいね、いくつかね？」といいながら、バタバタ茶を作っていきます。興味津々の私には、昔の「バタバタ茶」の楽しみかたなどを教えてくださいました。糸魚川でも、狭い範囲で伝承されてきたもので、後世に伝えるべく努力されています。

「バタバタ茶」という言葉を始めて知ったのは、大学の茶道部に在籍していたときでした。そして、三十年以上経過した今日、本物の「バタバタ茶」を体験できるとは……。

熊倉功夫著『茶の湯の歴史　千利休まで』には、

ボテボテ茶は、民俗であるからいつ頃からはじまったか分からない。村の寄り合いで客をもてなす一種のスナックであろうが、いまではごくわずかな人々に楽しまれるにすぎなくなった。（中略）こうした習俗を振り茶とも呼ぶ。振り茶は全国に広く分布しており、現在残っている所では沖縄のブクブク茶にはじまり、……鹿児島……松山……富山県のバタバタ茶、新潟にもその姿を残している。

島根県松江では、「ボテボテ茶」と呼ばれ、それが地方に広まってのではないかと言われています。「ボテボテ茶」は、この泡立てたお茶にさらに、好みの具、例えば、豆ご飯とか赤飯・山菜・漬け物等を適当に混ぜて飲むというか食べたようです。

会場になった相馬御風宅の主、相馬御風さんとは、一八八三年（明治十六年）糸魚川に生まれ、糸魚川で一九五〇年（昭和二十五年に死去しました。詩人・歌人・作詞家・文芸評論家・良寛研究家という肩書きで紹介されますが、早稲田大学に入学（十九歳）のころから詩人・文学者として東京で活躍していました。

ところが、大正五年（三十三歳）に突如十四年間の東京生活を捨てて郷里に帰ります。彼は、精神的苦悩から健康を損なうようになって、糸魚川に戻り、以降東京に行くことはなかったそうです。

そのときの心境を『還元録』に表して、文壇では賛否両論の意見が飛び交ったそうです。

北国の淋しい海岸町の、焼け跡に建てられた小さな自分の家への移転は、私達一家族には殆どそれが何のためになされたことであるか解らぬほどに、突然な事件であった。けれどもこの殆ど予期しなかった事件は、私達一家のものに少なからぬ幸福を与えた。（略）これまでに覚えなかった謙遜な、平静な、健康な、ゆったりとした気持ちが、私の全存在を浸潤したように覚えた。（略）

彼は生涯に五百曲以上の作詞をしていますが、多くが校歌です。資料によりますと、新潟県内の校歌百五十八、県外は七十二校の校歌、三重県でも「鳥羽水産学校」「四日市女子高校」の校歌が御風によるものです。

そして、もっとも有名な校歌は「早稲田大学」の校歌「都の西北」でしょう。他に童謡や歌曲を約二百曲も作詞していますが、その代表作は、「春よ来い」でしょうか。（大正十二年　広田龍太郎作曲）

春よ来い　早く来い
歩きはじめた　みいちゃんが
赤い鼻緒の　じょじょはいて
おんもへ出たいと　待っている
春よ来い　早く来い
おうちのまえの　桃の木の
つぼみもみんな　ふくらんで
はよ咲きたいと　待っている

「おんもへでたい」は、よちよち歩きができるようになった幼児が、家の中だけでなく、外で歩いてみたいという気持ちと、雪が消えて外で遊べる、という雪国の人ならではの心情が表れていて、「春を待ちわびる」切ないまでの思いと、喜びが感じられます。

相馬御風は「バタバタ茶」についても関心を持っていたそうで、私はこの場所で「バタバタ茶」をいただきながら、御風にとっても故郷の味だったのだろうと確信しました。

ブロンズプロムナード　鴉

「高橋あめや」と十返舎一九

高橋あめやと一九の碑

上越の土産物の決定版の一つは、「粟餡」や「翁餡」など関連の商品です。「粟餡」とは、餅米で作った水飴のこと、そして「翁餡」とは粟餡を使ったお菓子です。「粟餡」のルーツを訪ねると、高橋あめや（高橋孫左衛門商店）にたどりつきます。高橋家は、松平忠直に仕える武士でしたが、福井から主家（松平光長）に従って当地きました。主家没落後、町人になって、寛永二年（一六二五年）飴屋を開いたとのことです。創業四百年近い老舗中の老舗で、当代の孫左衛門さんは、十四代目だそうです。

餅米を原料にしているのに「粟餡」というのは、もともとは「粟」で作っていましたが、寛政二年（一七九〇年）に四代目当主により、原料を餅米よる水飴の製法が考えられました。「アメ色」と呼ばれる琥珀色の水飴です。しかし、名前は「粟餡」のままにしたとのこと。今も、「高橋あめや」さんでは、口伝の飴作りが行われているそうです。

「粟餡」の食べ方は、割り箸に巻き付けてなめるのが一般的で、砂糖が使われていないので後口がさっぱりしています。ほかに、大根を「粟餡」に漬け込んで作る「あめ湯」は、だいこんのエキスが出て、のどの痛みに効果があると言われています。

八月二日、旧北国街道に面した上越市南本町三丁目、「高橋あめや」（国の登録文化財）を訪ねました。本日の目的は買い物ではなく、お店の二階にある「お宝」を見せていただくことです。江戸の戯作者・十返舎一九は、高橋家に立ち寄り、幾日も滞在しておりました。『東海道中膝栗毛』が出版され、すでに成功をおさめていた文化十一年（一八一四年）、会津・信濃・北陸の取材旅行の途中に越後高田も訪れました。宿泊の御礼に、一九は自画賛を残していました。また、のちに書いた書物（『方言修行金草鞋』・『滑稽旅がらす』）の「高田」の記事には、「高橋あめや」の繁盛ぶりをさりげなく盛り込んでいます。現在、お店で包装紙に使われている絵柄は、『金草鞋　第八編』から転用したものです。

十返舎一九（一七六五年～一八三一年）の青年時代を描いた小説に、『そろそろ旅に』（松井今朝子著）があります。駿府（静岡）の下級武士の長男として生まれた重田与七郎貞一が、小田切土佐守様（大坂町奉行）を慕って仕官すべく江戸から大阪に赴く場面から、物語は始まります。大坂で無事仕官できたものの、武士をやめ、大阪の大商人の娘の入り婿となり、人形浄瑠璃の台本を書くのを手始めとして、ついには物書きの道に入るべく江戸に旅立ちます。松井さんの物語から、一九が生きた時代を知り、一九の人となりを知り、一九の人生を想像することができました。エピローグで、松井さんは次のように述べています。

> 若いときから、好奇心の赴くままに、どこへ行こうが、何をしようが、だれといっしょに暮らそうが、そのつどそこに馴染んでいるかに見せながら、時がくれば何もかもさっぱりと捨てておさらばできた男は、いうなれば永遠の旅人だったのだろう。（略）
>
> 辞世はまさしく人を喰った狂歌である。

この世をば　どりゃお暇と線香の煙と共に　灰さようなら

「一九は馬面だったのですかね。調子のいい人だったみたいですね。」

「高橋あめや」の奥さんと、一九談義に花が咲きました。松井今朝子さんは、一九の顔を「馬面」と書いていたからです。高橋さんによると、一九が武士をやめ、江戸の日本橋界隈に住み、物書きになったころ、「高橋あめや」は同じく日本橋本石町に支店を出していたそうです。「一九は客として飴を買いに来ていたかもしれない。」と、奥さん。

十返舎一九の書いた『東海道中膝栗毛』は、弥次さん（弥次郎兵衛）北さん（喜多八）が東海道を旅するどたばた道中記です。「膝栗毛」とは、馬に乗る（栗毛の）旅ではなく、足で歩く（膝が栗毛）旅という意味です。

出版の評判をみながら、道中がだんだん延び、お伊勢参りをしてから、京に上ることとなります。

田辺聖子著『東海道中膝栗毛』を旅しよう」で、主人公の弥次・北たちを「とにかく厚かましくって図々しくって、ケチで助平で、人倫に悖ることを平気でやって一つまり人間の裡なる、悪しき部分を、モロ露呈する、けしからん

おっさんお兄さんたち」といい、しかし、「おどけた道化「人を笑わせつつ」「悲しみがある」。とも書いています。

どじ話・だじゃれ・お尻やおしっこなど、下品な話が満載の本がなぜ売れたのでしょか。

その理由は、町人も読み書きのできる人が増えてきた時代であることや、町人も暮らしを楽しむ経済力がついてきたことにもあるようです。

『東海道中膝栗毛　五編下』では、弥次さん北さんは伊勢神宮に行く途中、松阪に一泊しています。松阪の宿を出る時に詠んだ狂歌は、次のようなものです。

鳶も輪に　なりて舞ふ白そ
たひ人のおとり出たる　松坂のやど

（歌意　早朝鳶が輪を描いて飛ぶ晴天に、旅人も心うれしく宿からもおどり出たのは、松坂踊りならぬ、松坂の宿だった。

――小学館『東海道中膝栗毛』より）

高橋あめや　一九の絵

寺町めぐり寺めぐり

子供のころ、お寺は催し物会場でした。春に巡回している「伊勢獅子舞」を見たのが、近所のお寺の境内でした。早春の風物詩「初午の厄落とし（継松寺）」の縁日もお寺の境内でした。露天で、「猿はじき（災いをはじき去る。の語呂合わせ）」の縁起物や「粟おこし」を買ってもらうのが楽しみでした。また、中学生のころ、お寺の奥様（姉の友人のお母様）から生け花を習っていました。教室はお寺の本堂でしたが、果たしてそこに仏様がいらしたか記憶にありません。

上越市には、寺町があります。以前金沢の寺町に住んだことがありますが、上越市の寺町は、金沢のそれよりもっと集約的で、つまりお寺がひしめき合っています。上越の寺町は、南北二キロメートル足らずに二筋（表と裏）の通りがあります。現在、寺町二、三丁目では浄土真宗（三十六ケ寺）・曹洞宗（十ケ寺）日蓮宗（七ケ寺）浄土宗（六ケ寺）真言宗（四ケ寺）時宗（一ケ寺）と、宗派はまちまちです。どうしてこのような町の形ができたのか知りたくなりました。

「寺町まちづくり協議会」（寺町二、三丁目の六十三ケ寺で構成）は、平成七年（一九九五年）年設立したNPO・ボランティアセンター登録団体です。この団体が編集したガイドブックに『寺院めぐり　高田寺町界隈寺院ガイド』があります。その前書き「寺町へのいざなう」には、次のように寺町を紹介しています。

……上越市のシンボル高田城は、慶長十九年（一六一四年）徳川家康の六男松平忠輝公の居城として築かれました。築城にあわせて城下町の整備も行われ、儀明川の西側に寺院を集中させました。これが寺町の始まりといわれています。……寛文五年（一六六五年）の地震で大被害を受け……現在見られる寺町のまち並みは、当時の高田城主松平光長によって、新たに復興されたものと考えられています。今でも、六十三ケ寺もの寺院が墓を連ねており、通りを挟んで二列に整然と配置される寺町の景観は、たいへん珍しい寺院群として全国にも他に例を見ないものです。……

八月二十六日「寺町寺院めぐり」（寺町まちづくり協議会主催）があり、「高安寺」「善行寺」の二ケ寺を見学しました。残暑厳しい時節にもかかわらず、百名近くの参加者がありました。この寺院めぐりは、平成十年から始まったそうで、毎年二、三ケ寺を見学するとのこと。

「高安寺」は、上杉謙信の祖父長尾能景が開基した（一四八〇年）曹洞宗のお寺です。ここでは、この寺院の歴史的な意味について、特に上杉（長尾）家や春日山との関係までさかのぼって説明がなされました。

「善行寺」は、日蓮宗の寺院です。一五三七年、結城（茨城県）で創建されてから、上越に移るまでの沿革史を聞いた後、「加持祈祷」をしていただきました。住職の西山要耕さんは、総本山久遠寺において、百日の荒行（一日二食の白粥、睡眠三時間程度、水行と読経三昧）を経験された方でした。「加持祈祷」は初めての経験でしたが、この荒行を経験した人しかその資格がないと聞いて、神妙な面持ちで臨みました。

寺町　善行寺

『源氏物語　葵の巻』には、出産間近の「葵の上」の出産の無事を祈る「加持祈祷」を行っていたところ、「葵の上」に取り憑いた生き霊（六条御息所の霊）があぶり出されるという、おどろおどろしい場面があります。「加持祈祷」という言葉に、このようなイメージを持っていたのですが、現代の「加持祈祷」からは、何かしら「力」を感じ、「勇気」をもらったように思いました。そればかりか「福銭」もいただきました。荒行の場におかれていた和紙でお賽銭を包んだものです。財布に入れて魔除けにしています。

……高田寺町の落ち着いた雰囲気とその景観が気に入り、徘徊の回数を重ねるうちに寺の魅力にひかれ、思いつくままに住職さんを尋ね、快く迎えていただきました。あれこれ話を聞き巡るうちに、上杉謙信とゆかりの毘沙門堂、惣時寺や日朝寺、親鸞の浄興寺や常敬寺、石山合戦の本願寺、松平忠輝と善導寺、松平光長と天崇寺をはじめ、時宗称念寺が新田義貞と有縁の寺であったり、石田三成の末裔とみられる檀家が興徒浄国寺にあるなど、日本歴史に直結する寺町寺に、懐古の思いがいよいよ高まります。……

寺町　福銭

田中正さんの著書『よも山集め話　越後高田の寺町』は全六百ページにおよぶ労作ですが、「はじめに」には、このような記述があります。

寺町はその後、戊辰戦争（一八六八年）後の会津藩捕虜（一七四五名）の預かり所となり、大正四年の寺町大火（二十一ヶ寺を焼く）を経験し、太平洋戦争時には、疎開者の受け入れ先になるというふうに、さまざまな試練をくぐってきました。現在、このような町の形を維持しているのが奇跡のように思われます。寺町の寺々が、一塊になって歴史の荒波を乗り越えてきたのでしょうか。寺を支える越後の人々の信仰心の厚さゆえでしょうか。

十月二日には、六十五寺社参加の寺町まちづくりフェスティバル（寺町まちづくり協議会主催）が行われました。時間がちのあいにくの天候でしたが、いつもと違う「寺町」のにぎわいがありました。各寺が門戸を開放し、宝物の一般公開をする寺もありました。また、「ガイドブック」の他に「御朱印帳」をいただき、寺々を巡って御朱印を（無料あるいは寸志で）もらうという企画がありました。スタンプラリーのようで、お寺を訪れるきっかけになる良い趣向だと思いました。もちろん私も六ヶ寺の御朱印をいただいてきました。

直江の港と発電所

十月十五日（土曜日）、上越市直江津港に行ってきました。建設中の中部電力の上越火力発電所を見るためです。発電所は、発電設備の試運転がはじまっており、仮煙突から、炎（フレア）（余剰ガスの放出のため）が出ていました。その向こう側にある佐渡汽船のターミナルには、ちょうど佐渡の小木からの大型旅客カーフェリーがすべるように入ってきました。

発電所を望む海岸線では、釣りを楽しんでいる老若男女に出会いました。（原則的には、ここで釣りはできないことになっていますが）昨夜来の雨

火力発電所　釣りをする人、見る人

があがったものの、重い雲がまだ居座っているという空模様の土曜日の昼さがり、約十組の釣り人たちは、それぞれスタイルで釣り糸を垂れていました。休日にはよく来るという市内の青年は、アオリイカをねらっていると、いくつかのルアーを見せてくれました。長野県飯山から来たという男性は、すでにカマスを二尾釣っていました。やはり長野から来たという中年のご夫婦に話を聞くと「夫の趣味の釣りにつきあう形で始めた。釣れるとうれしいですが、えさ代や道具代でけっこう高くつくんです。」と奥様の弁。おやおや、小さい子供二人を連れたご夫婦がやってきました。やっぱり長野から来たのですって。海を見て、子供たちが飛び跳ねています。

直江津の海は、長野の海でもあると言われ、長野県も、直江津港整備のための交付金を出していると聞いていましたが、納得です。釣り人たちは、アオリイカ・クロダイ・小アジ・カマスなど、ねらう獲物も釣り方もまちでしたが、共通点もありました。みな「自身のこだわり」があり、「自身のこだわり」を熱く語る人々であることです。

上越市の海岸部「直江津」という地名、「直江」は単調に続く海岸線（直……まっすぐの意）から来ているという説があり、割を賄えるとのことです（「新潟日報」による）。

また、同じく荒浜埠頭東側には、液化天然ガス受け入れ基地（国際石油開発帝石のタンク）が建設されます。

この発電所の燃料、液化天然ガス（LNG）の主成分はメタンガスです。本来のガス（気体）をどのように運び、貯蔵するかというと、家庭用の都市ガスなどは、パイプラインで気体のままで家庭のコンロなどに届けられますが、発電用の大量のガスの運搬には、「液化」をして運ぶ方法が考えられます。ガスをマイナス百六十八度以下に冷却すると、液体となり、体積は六百分の一になります。このLNGを専用のタンカーで、受け入れ基地まで運びます。LNGの貯蔵タンクは冷却機能を維持するため、二重構造になっていて、タンクとタンクのすきまには、保冷剤「焼成パーライト」が詰め込まれます。

……上越火力発電所で二十七日、工事中の液化天然ガス貯蔵タンク内の床に、上越市立八千浦小三年の児童三十四人が、未来に思いをはせながら絵や字を書き込んだ。タンクの耐用年数は三十年。将来的に取り壊す可能性のあるタンクをタイムカプセルに見立て、子どもたちがフェルトペンで……自由に書いた。……（十月二十八日付朝日新聞）

今年の三月十一日は、私にとっても生涯忘れることのできない日になりそうです。あの日の自分がどのようであったかも、たどれるほどに。また、二日後の福島第一原子力発電所の爆発も、大変衝撃的でした。私の住宅は公務員住宅に準ずる集合住宅ですので、南相馬市から避難した方々の「避難所」として、空き部屋が提供されました。また、九月からは、同じ部屋が「みなし仮設住宅」として住まいされていま

火力発電所　荒浜より

す。テレビの向こう側の「災難」は、遠い所の話ではないのです。

新潟県には、刈羽村と柏崎市に東京電力の原子力発電所があります（新潟県は東北電力管内）。それは首都圏の電力供給を担っています。そして、その原子力発電所の半径三十キロメートル圏内に、上越市はあります。一方、上越市内にも原子力発電所の関連企業があり、多くの職場が提供されています。

三重県では、芦浜（度会郡南伊勢町・大紀町）に原子力発電所建設計画がありましたが、平成十二年（二〇〇〇年）、中部電力は建設を断念しました。

私は、三重県民は良い選択をしたと思っています。

柏崎刈羽原子力発電所

直江津駅前に「放浪記」碑
森光子さん公演を記念
原作・林芙美子の宿泊地

女優・森光子さん主演で公演二千回を超えた舞台「放浪記」の記念碑が上越市のJR直江津駅前に建立された。

場所は原作者の林芙美子が宿泊し、小説にも登場したいかや旅館（現センチュリーイカヤ）前。文学、観光面で直江津を全国発信するものとして期待されている。

国民栄誉賞を受賞した女優・森光子さん直筆の碑

碑は森さんの直筆で林芙美子が好んだ言葉「花のいのちはみじかくて…」を刻み、同市出身の彫刻家、岡本鋏二さんが制作。バイタリティあふれる女性の森さんと林芙美子をイメージしたブロンズ像が載っている。

建立した「森光子『放浪記』記念碑を建てる会」の田中弘邦会長は除幕式で「直江津の象徴として放浪記を思い出すものとなってほしい」とあいさつ。森さんのメッセージも読み上げられた。

森光子さんのメッセージ

上越市の皆様、ごきげんよろしゅうございます。森光子でございます。

三月に東日本を襲った思いがけない大震災以来、「ガンバロー日本！」の声と共に、全国の人々が心を一つにした二〇一一年も、あと一と月余りで暮れようとしております。勇気と元気で強い日本を、いつも心にがんばってまいりましょう。

私事でございますが、今年は舞台の「放浪記」も初演の昭和三十六年から数えて五十年を迎えることになりました。〝花のいのちはみじかくて苦しきことのみ多かり き〟の詩のことばを心の糧といたしまして、「人が生きるということ。人の幸せとは」の表現を求めて舞台に立ち続けました。そして、半世紀にわたって一期一会のお客様に観ていただくことができました。

その節目の年に、私のライフワークとなりました舞台「放浪記」の記念碑を、林芙美子先生ゆかりの一文学のあるまち直江津」に建立していただけますことは、面映ゆいことではございますが、また一方、言葉では言い尽くせないほどの喜びでございます。

直江津の町をはじめとして上越市の皆様、ご関係の皆様のご厚情、ご尽力に感謝いたしますとともに、心からなるお礼を申し上げます。

二〇一一年十一月十三日

森　光子